

# 平成二十年度 大学院研修旅行（韓国旅行）報告

伊 藤 好 美

初日

羽田空港を発つて僅か二時間ほどで金浦国際空港に到着した私たちは、大型タクシーでホテルへと向かった。車窓を流れる景色は日本と大差ない。特に市街地に入ると、見慣れたファストフード店が立ち並び、日本のどこかの街かと思うほどである。

平成二十年度の大学院研修旅行は、二〇〇九年二月三日から二六日にわたる三泊四日の日程で実施された。行き先は韓国である。上代日本文学に多大なる影響を与えた、先進国中国の文化は、韓半島を経て日本に伝わった。以後、長い時を経て近代に至るまでの日韓交流史を体感するため、海を越えた研修旅行が実施されたのである。

上代文学演習の履修者・聴講者の計六名からなる参加者は、池田先生の御指導のもと、挨拶や道を尋ねるなどといった簡単な韓国語会話の練習にも励んできた。そして、韓半島の歴史や見学予定地についての事前学習を重ねて、研修旅行に臨んだのである。

宿泊先は地下鉄明洞駅にほど近い世宗ホテルであった。「世宗」とは朝鮮王朝の第四代国王の名で、韓半島独自の文字であるハングルの制定もこの世宗国王の功績である。ホテルに荷物を置いた私たちは地下鉄に乗り込み、この旅の最初の目的地・景福宮へと向かった。

景福宮は朝鮮時代の正宮であるが、壬辰倭乱（豊臣秀吉の朝鮮出兵）により全焼するという悲劇に見舞われた。そ



の後、宮は再建されたものの、日韓併合という近代の歴史の中で、韓国は日本に国権を奪われるという事態に陥る。その際、景福宮には日本による朝鮮総督府が置かれたため、この宮は植民地支配の象徴として韓国国民にとって憎むべき存在となってしまったのである。

このように日本人の私たちにとっても心苦しい歴史を強いられてきた景福宮ではあるが、一九四五年の国権回復後は、かつての景観を取り戻しつつあるという。今なお復元工事の途中ではあるが、現在では韓国のシンボルとして国内外の観光客で賑わう場所となっているのである。

私は、ここで「守門將交代儀式」を見ることを旅の大きな楽しみの一つにしていた。現在「王」はいないものの、禁軍による王宮警備のさまが再現され、屈強な兵士たちが門を守っている。彼らは「守門將」と呼ばれ、そのいでたちは朝鮮時代のままである。そして、この守門將たちが、毎日定刻になると門番交代の儀式を行うのである。午後三時、いよいよその時刻となった。たなびく四神の旗のもと、武装した兵士の列が移動を始める。予想以上の大規模な儀式に、しばし見とれてしまった。

交代儀式を見終え、宮の内部へと見学の歩を進めていくと眼前に広い池が現れた。池の中央には、楼閣が浮かんでいるかのように建っている。慶会楼である。眺望を重視し

て背面以外に敢えて壁を設けていないこの楼閣で、当時の官人たちが酒宴を催したという。池に小舟を浮かべての風雅な酒宴を想像していると、奈良朝の官人たちも同じようなことをしていたのだと池田先生が解説してくださった。

我が国でも平城宮跡の東院庭園にこのような建物が復元されているが、慶会楼のほうがはるかに大きい。これを見られただけでも海を渡った甲斐があつたものである。ここ韓国で、万葉人たちの酒宴の様子に思いを馳せることができるとは、上代文学とはなんとグローバルな学問であるうかと感じた。

最初の見学地にして既に大きな充実感を味わうことのできた景福宮をあとにした私たちは、仁寺洞へと移動した。仁寺洞はエリザベス女王の訪問を契機に見直されたという韓国の伝統街である。現在ではいわゆる土産物通りのようになっている。韓国らしい雑貨類を見て歩くのも楽しい。ここで自由行動のあと夕食をとり、ホテルへと戻った。

だが初日の行程はこれで終わりではない。私たちは、すぐさま、ソウルタワーに向けて出発した。ソウルタワーは、南山という山の上に位置している。そのため、ここからはソウル市街を一望することができるのである。タワーに上る時刻を夜としたのは、夜景によりソウルの全景を知ろうとするためである。天気は良好で、きらめく街の光や、道

路に連なる車のテールランプがくっきりと見えた。彼方には、日中訪れた景福宮の灯りも瞬いている。光のない真っ暗な帯は漢江であろう。ソウルの象徴であるソウルタワーからの夜景を十分に堪能し、初日の行程が終了した。

## 二日目

二日目の朝食は、皆で粥を食べに行つた。韓国では朝食に粥を食べるのが一般的だという。朝食を済ませた私たちは、西大門刑務所歴史館へと向かつた。

西大門刑務所は、韓国が日本の植民地であつた時代、その支配に抵抗した独立運動家たちが投獄された刑務所である。現在はその跡地に歴史館が建設され、民族受難の歴史を後世に伝える役目を果たしている。ここで日本政府が行つた拷問を示す資料を目の当たりにし、日本人である私は立ちつくすよりほかなくなつてしまった。傍らでは、地元の小生たちが、引率の先生の熱心な説明を真剣な眼差しで聴いている。大人でも息をのむような凄まじい資料の前に、幼い彼らは日本や日本人に対してどのような感情を抱くのだろうか。あの先生が子どもたちに何をどう伝えていいのか、言葉が理解できないことにもどかしい心地がした。ここを訪れて、気持ちが悪くならない日本人はいないのであるだろうか。私も重たい気持ちを引きずつて、こ

の場所をあとにした。

続いては国立中央博物館の見学である。この博物館はとにかく広く、展示品も盛りだくさんである。見学時間はおよそ二時間であったが、欲を言えば一日中いたいくらいであった。絵画や彫刻の中には、「日本でも似たものを見たことがある」と思わせるものが多いのも興味深い。数ある展示品の中、華麗さに目を奪われたのは、金の土台に玉を散りばめた「新羅金冠」であるが、最も長時間眺めたのは「騎馬人物形土器」であった。馬と、それに乗る男性を象った小さな土器であるが、精巧なばかりでなく、思わず微笑みたくなるような可愛いらしさに心惹かれた。あらゆる展示品に興味をそそられ過ぎたため、楽しみにしていた「半跏思惟像」を駆け足で見なくてはならなくなってしまうことが心残りとなったが、実に楽しい時間を過ごすことができた。

昼食は鷺梁津市場でとった。水産市場であるここは、購入した魚介類を市場内の食堂で調理して提供してくれる。韓半島は海に囲まれているだけあって、日本と同様に刺身がおおいしかった。

次は新村へ。新村は延世大学のお膝元で、韓国の若者たちで賑わう学生街である。延世大学から梨花女子大学にかけての、衣料品などの店が建ち並ぶ路地をしばし自由散策

したあと、路地裏の焼肉店で夕食となった。トゥエジカルビと冷麺を満喫し、二日目の行程を終えた。

### 三日目

三日目の行程は移動範囲が広いいため、貸し切りバスでの行動となった。日本語の上手な添乗員さんが、韓国の歴史から最近の若者の流行まで幅広い話題を提供してくれる。会話を楽しむうちに、バスはソウル郊外の街・水原市に到着した。ここで私たちは、華城を見学することになっている。華城は朝鮮時代の城塞遺跡で、ユネスコの世界遺産にも登録されている名所である。城塞だけあって、全長五キロを超える城郭に囲まれた内部には、砲台、やぐら、門などが所要所に配備されている。このように説明すると物々しい感じになってしまうが、実際には、遺跡を間近に見ながらのウォーキングコースといってもいいほどに整備の行き届いた明るい場所である。見学コースの途中にあった物見やぐらに登ると水原市を一望することができた。建物の内部に入り、そこからの眺めを体感できるのは実地学習ならではのである。華城見学で歩き疲れたあとは、本格石焼きビビンバの昼食で空腹を満たし、次の目的地・韓国民俗村へと出発した。

韓国民俗村は、民俗文化の資料を収集・保管した野外博

## 華城の水門



物館である。内部には韓国の伝統家屋が移転・復元されて建ち並び、あたかも一つの村のようになっていて。家屋の軒先には、とうもろこしが干してあったり、倉庫の中には農具が置いてあったりと、当時の生活様式を生き生きと伝える工夫が凝らされているため、あらゆる建物に近付き、覗いてみたい好奇心に駆られる。歴史・文化の勉強になるのはもちろんのこと、タイムトリップしたかのような楽しさを味わえるこの場所は、観光客ばかりではなく、地元の人たちにも人気のスポットだという。

村の散策途中、小さな扉がついた建物の前に無数の靴が脱いであることに目が留まった。その時ちょうど扉が開き、中から手招きをしてくれる人がいた。誘いに従い、身をかがめて入り口をくぐると、そこはオンドルの効いた暖かい部屋であった。オンドルとは、韓国における伝統的な暖房の設備である。日本でもそうした設備のある古代遺跡が見つかっていると聞くが、韓国では現在でも広く利用されている。だが、宿泊しているホテルには近代的なエアコンが完備されていたため、未だそれを体験することはできていなかった。実際にオンドル部屋の床に腰をおろしてみると、座る場所によって温かさが違うことがわかり面白い。小さな部屋は私たちが入ったことにより満員となつてしまったが、招き入れてくれた韓国人御一家の厚意と相俟つ

て、身も心も温かくなった。

民俗村の見学を終え、ホテルへと帰着した頃には既に夕刻を迎えていた。韓国で過ごす最後の夜は各自自由行動である。そこで私はチムジルバンを体験してみることにした。チムジルバンは韓国版のスパ・銭湯ともいうべき入浴施設である。大衆浴場が各地で見られるという入浴好きの国民性は、日本と相通じる。この研修旅行は上代から近代までの日韓交流史を体感する旅であるが、現在でも両国の文化や国民性は十分似通っているといえるだろう。そんなことを考えながら高麗人參の香りが漂う薬湯に浸かって一日の疲れを癒やし、三日目の夜を終えた。

### 最終日

いよいよ迎えた最終日。帰国の飛行機まで、時間を惜しんで見学地を巡る。まずは徳寿宮へ。徳寿宮は、壬辰倭乱の際に他の王宮が焼失してしまったため、臨時の王宮として使用された宮である。韓国五大王宮の一つであるそれは、高層ビルがそびえ立つビジネス街の中にあった。道路を挟んだ正面に位置するソウル市庁前広場は、二〇〇二年のワールドカップ時、韓国サポーターたちが熱狂的な応援を繰り広げた場所である。ハイスピードで押し寄せる近代都市化の波の中で朝鮮時代の王宮が姿を留めていることに、歴

都市部に位置する徳寿宮



史の力強さを感じずにはいられない。

徳寿宮を見学する中で特に興味を引かれたのは、巨大な水時計である。我が国最初の正史である『日本書紀』の斉明天皇六年（六六〇）三月の条には「皇太子、初めて漏刻を造り、民に時を知らしむ」との記述が見られる。この文中の「皇太子」とは中大兄皇子であり、「漏刻」とは水時計を意味する。徳寿宮の水時計を間近に見て、これと同様の装置が万葉の時を刻んだのであろうと想像し胸が高鳴った。

徳寿宮をあとにした私たちは、この宮のほど近くに立つ李舜臣像へと向かった。李舜臣は壬辰倭乱時における朝鮮軍の将軍である。水軍を率いて日本軍を撃退したことで知られ、韓国では国民的英雄として崇められる存在となっている。その英雄像は、交通量の激しい道路の中央に立っていた。そこは国民的英雄の立像場所として想像を超えていたが、仁王立ちで睨みを利かせる英雄の傍らをバスやタクシーが猛スピードで行き交う光景は、近代的な生活の中に歴史が溶け込んでいることを感じさせるものであった。

続いては宗廟へ。ここは朝鮮時代の王と王妃ならびに功臣の位牌を祀り、祭祀を行っていた王室の靈廟である。石畳が敷き詰められたこの場所は、これまでの見学地とは趣を異にする静けさである。儒教の教えに基づいて建築され

たという建物は装飾も簡素で、場の神聖さを際立たせている。ここに漂う荘厳な空気には、何とも心惹かれるものがあった。

宗廟の北には、昌慶宮が隣接している。正宮である景福宮の離宮として建てられたこの宮を散策した後は、いよいよ旅の最終見学地である昌徳宮へと向かう。

昌徳宮は昌慶宮と同様に離宮として用いられた宮であり、この二つは東西に隣接している。だが、自由に散策できる昌慶宮とは異なり、ユネスコの世界遺産にも登録されている昌徳宮は、自然と建築物の保護のため、定められた観覧時間内しか中に入ることができないのである。

定刻になり、日本語で解説をしてくれるガイドさんに従って多数の日本人観光客らとともに入場する。ガイドさんの解説により、宮殿の屋根の端には宮の守護神として小さな人形が並べて置かれたことを知る。屋根に並ぶ人形については、初日に景福宮を見学したときから気になっていたのだが、それらが西遊記の登場人物を模しているのだという解説を聞き、旅の終盤に人形の疑問を解決することができ嬉しくなった。

見学コースは、宮殿内の建物や植物の解説を聞きながら、上り下りのある道をおよそ一時間半に渡り歩き回るもので、これにより、整然とした宮のイメージは覆された。宮の内

部がまるでハイキングコースのような起伏に富んでいるということは資料からでは想像できないことであり、疲れとともに実地学習の大切さを認識した。

見学を終え、昌徳宮の門をあとにしたところで、この旅の見学地を巡り終えた充実感に包まれた。そして夕刻、金浦空港から帰国の途に着き、この研修旅行の全行程が無事終了したのである。

海を渡った韓国の地で日韓の繋がりを感ずることのできた今回の研修旅行は、上代文学を専攻する私にとって大変貴重な経験となった。同時に、この研修旅行が楽しいばかりの旅ではなかったことが、自分自身にとって大きな意義をもたらしたと考える。

見学した歴史的建築物の大半が、日本の手により失われたかつての姿を復元したものであるという事実からは、根深い反日感情の理由の一端を突き付けられているようで心苦しさを覚えた。そして、アジア諸国との関係を含めた自国の歴史に対する己の無知さに恥じ入るほかなかった。

自国の歴史や文化にさえも疎いままでは、この旅の中で学んだ日韓の歴史的・文化的繋がりを研究に反映させることは不可能であろう。この四日間の貴重な経験を活かすためには、今後、相当の努力をもって研究を続けることが必

要であると痛感したのである。

最後となったが、言葉の不自由な異国の地で充実した四日間を過ごすことができたのは、私たちを教え導いてくださった池田三枝子先生のおかげである。事前学習から丁寧な御指導をいただいた池田先生へお礼を申し上げて、研修旅行報告を終えることとする。

(平成二十一年度国文学専攻博士後期課程一年 伊藤 好美)